



■ 第3回 SPARC Japan セミナー 2015 「研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性」

2016 年 1 月 19 日(火) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:87 名

本セミナーは、新しい学術情報のプラットフォームについて、概要と最新動向を把握するとともに、研究者の立場から実際の活用事例を紹介してもらい、研究活動におけるプラットフォームとしての可能性や課題および大学図書館がいかに関与していくことができるかを議論することを目的に開催されました。

現各登壇者の講演要旨、配布資料等を含め詳細は、SPARC Japan の WEB サイトをご覧ください。

(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20160119.html>)

講演

概要説明

三根 慎二 (三重大学人文学部)

研究成果を残す「場」はこれまで多くの学術出版社や学協会であった。サービスポータルやアクセスプラットフォーム、端末プラットフォームがこれらであるが、現在では新しい物が続々と現れてきている。研究者向け SNS、Google Scholar や ReadCube がそうである。Nature による調査によれば、多くの研究者が様々なものを利用している。一方で懐疑的・保守的な意見もある。信頼性がないことや、研究のコアな部分と関係がないことなどがその理由となっているようである。ではどのように図書館側は関わっていけばよいのか。

"The slow revolution in scholarly communication and how libraries can adapt their perspective"

Jeroen Bosman (Utrecht University Library)



1964 年の新幹線開通とともに生まれ、日本に対しては先端を進む国として非常に興味を持っていた。テクノロジーは学術コミュニケーションにも貢献できると考えている。まずはテクノロジーについて。はじめは 20 しかなかったものが 100 を超える新しいツールが数ヶ月のうちに現れた(101(「ワン・オー・ワン」)ツール)。文献検索、分析、執筆、出版、アウトリーチ、評価という事柄にこれらのツールは利用されている。現在は 600 を超えるツールがある。そもそもは出版社が作ったものであるが、研究者自身が開発したものもあり、オープンツールなので誰もが利用可能である。「G-E-O モデル」というシンプルなモデルを用い、学術コミュニケーションツールの利用を考えるにあたり必要な視点は、オープンであるか、効果があるか、透明性が高いか再現性があるかである。もちろんこれには時間がかかるが、正当な評価により不正が防止される。本会合のような会議が世界中で行われ、各国で議論が進んでいる。

もう一つ、研究のワークフローがどのように進むかという、「準備－発見－分析－執筆－出版－アウトリーチ－評価」の円環であるが、実際はもっと複雑になる。オープンサイエンスにより、これらの順序が変わってきている。ブランクの段階で世に語りかけられるようになってきたし、研究のパートごとに発表できるようになってきた。さらにこれにより信頼性を上げることもつながる。さまざまなツールをつなげた、幾つかのモデル(伝統的、現代的、革新的、実験的)もある。

アンケート調査の予備的結果から、実際に研究者はどのように使っているのかが明らかになってきた。2015 年末までのところ、回答は 8,028 件であった。オープンアクセスを支持するかという質問では、国別ではベネズエラでの支持が高かったが、何故かはもう少し深い分析が必要である。最終的なデータが集まった段階で、多くの人に個別に分析して貰う予定である。例えばアウトリーチでは、若手は Twitter をシニアよりも多く利用している。文献処理では EndNote が一番多く、Mendeley やその他を使っている人々が続いた。

図書館としてどのように役立つことができるかをそれぞれの段階でリスト化したので、今後の役割を議論したい。伝統的な強みを固めることにとどまらず、新しいツール開発の人材起用も重要である。101 プロジェクトの生データ活用のプラットフォームを紹介したが、図書館のさらなる行動を促したい。日本からの回答は 250 にとどまっており、アジアの一部の国からの反応もなかなか集まらないのが現状である。個別に調査を行うことも可能なので、連絡がほしい。これは現状を知り、今後の方向性を見ていくゴールではなくスタートである。

研究者向けソーシャル・ネットワーク・サービスの概説

坂東 慶太 (Coordinator for the Online Platform for Scientific Communication)

研究者向け SNS について図書館目線で皆さんと一緒に考えたい。ビジネス向け、パーソナル向けに遅れること数年、研究者向け SNS については 2008 年に同時にスタートした ResearchGate・Academia・Mendeley が多くの研究者に利用されているようだ。理系の研究者は ResearchGate の利用が多い傾向である(2014 年 8 月の調査)。文系も同じだが、文系は Academia も多いようである。101 の調査(2015 年 6 月の段階)では、研究成果を公開するプラットフォームとして機関リポジトリを利用するという回答が多いようだが、回答者数は図書館員が多かったようである。ResearchGate は、機関リポジトリと同じくらい利用者が多いようである。

リポジトリ、コラボレーション(アノテーション)、研究者

の評判の数値化、機関の評判の数値化についても言及したい。研究者向け SNS は、長期保存の観点などからオープンアクセス・リポジトリでないという否定的な意見もあり、機関リポジトリを取るべきという考えもある。アノテーションに関しては出版社を多く巻き込んでオープンアノテーションという動きが加速されており、独自のアノテーション機能を擁する研究者向け SNS の今後の動向を注視したい。数値化に関しては異論も多くある。利用する側は、悪い面も知った上で使わないと足を救われる可能性がある。一方、Altmetrics の観点からは、数値化にはより多くのデータが必要であるという意見もある。図書館として、機関リポジトリや研究者情報システムと研究者向け SNS の連携などについて考える必要がある。

研究用 SNS の利用: ResearchGate

鳥海 不二夫 (東京大学大学院工学系研究科)

ユーザーとして、またソーシャルメディアの研究者として、ResearchGate をどのように利用しているのか、その利点は何かを話したい。①STAT 機能により自身の論文の評価を日常的に知ることができる。②Upload は論文シェアに便利に使える。③Request することもできる。④実験結果の共有も可能。⑤Jobs では世界の求人がみられる。⑥Question は Q&A ができる。また、⑦履歴書の自動作成という機能もあり、意外と便利である。

ソーシャルメディアの成功と失敗があるが、「使われる」条件とは何か。ユーザーが情報をみんなで共有することに価値がある。公共財ゲームによる表現(協調か裏切りか)で理解でき、みんなが裏切る方に解がある。みんなが協調する方向にさせることを促進することでユーザーを獲得できるのではないか。このとき、協調したユーザに何らかの報酬を与え、さらに報酬を与える人に報酬を与えるとうまくいくことが多い。これをもとに ResearchGate を評価してみると、協調促進という観点から優秀なシステムが実現されているように見える。

ブログは研究に役立つか？どのように？

垂井 淳（電気通信大学大学院情報理工学研究科）

2010 年に起こった数学領域でブログが使われた例がある。P≠NP 予想をめぐる、200 コメント/日のペースで議論を行った中で、100 件は本気の数学者によるコメントだった。Deolalikar 氏の論文について、Lipson 氏が研究ブログで取り上げたことから約 5 日間の議論が続いた。結果的には重要な欠陥があるとのことで収束した。早い段階でチューリング賞受賞の Cook 氏が賛同したことも影響した。Tao 氏や Gowers 氏も議論に参入し、Tao 氏の Wiki ページもサマリーとして機能した。一般の人が面白がってくれることは嬉しい。解説するメディアが入ってくるととても機能する。欧米の科学ライターは本当に早い。そもそもなぜ騒ぎになったかといえ、多領域の概念を組み合わせると主張し、さらにスター研究者たちが参画した。これにより注目が集まった。

ブログが役立つ点としては、ニュースを知ること、プレゼン動画で詳しく効率的に理解できること、ソーシャル・ネットワークキングとしては他者とつながっているのが嬉しいことがある。一方、落ち着かないことや、集中できないことはマイナスである。別証明の発表にも有用ではないか。

パネルディスカッション

モデレーター(兼パネリスト): 林 和弘

(科学技術・学術政策研究所)

パネリスト: Jeroen Bosman (Utrecht University Library)

／坂東 慶太／鳥海 不二夫 (東京大学)

／垂井 淳 (電気通信大学)／三根 慎二 (三重大学)



林氏: SPARC Japan においては、Mendeley を開発した Victor Henning などをお呼びしてソーシャルメディアや新しい学術情報流通サービスに関するセミナーを何回か行ってきた。。

かつての論考で学術コミュニケーションサービスの発展

を段階的に見ると、1 段階目としては紙の機能の電子化がおこり、2 段階目にはそれが漸次的に発展するが、3 段階目は、そのサービス本来の目的に合わせた非連続な変革が起こる、ということを述べたことがある。例えば、ピアレビューを出版後にオープンに行うという試みも非連続な変革とみることができる。そして、学会運営に携わった経験から、SNS が学会の使命である研究者のコミュニケーションの場を非連続に創り出し、学会の脅威になりうるという視点が以前からあった。幸か不幸か Bosman 氏の話から当時思ったよりは緩やかにこの変革が進んでいることがわかった。一方で研究者は積極的にこのようなツール、新しいサービスを利用する者とし、しない者に二分できる。学術情報流通の革新に関してギャップを感じているのではないだろうか。数学などでは昔からブログなどが活用されていたので、新しいものを使わなくてもいいのでは？オランダではどうか。

Bosman 氏: 一部の分野ではリポジトリ機能を使っているところはある。物理や経済学ではプリントでシェアが良しとされている。将来的には新しいツールが出て、変わってくるかもしれない。

林氏: 次世代への兆しはまだ？

垂井氏: SNS の付加価値はあるかもしれないが、その仕組が透明でない。単純な方がいいと考えている。

鳥海氏: どの世代も面倒くさがり。仕方がないからやっている。SNS だと少しのインセンティブをもらすので、やりやすくなるのでは。

林氏: 公共財理論の考え方は機関リポジトリ改善に役立つのでは？

三根氏: 機関リポジトリとしてはフィードバックになるものがないので、やりたがらない。

林氏: 機関リポジトリのウィークポイントが改めて顕在化したとも言えるのかもしれない。フロアからどうぞ。

フロア1:論文を SNS に載せてもいいのか？著作権について、出版社のポリシーを確認してくださいとお願いしている。機関リポジトリのメリットは著作権処理か。

林氏:お互いが順守すればウィンーウィンになる。

フロア2:オープンアクセスの論文でなければ SNS に掲載するのはダメ。コピーライトの件、利用頻度の把握についても問題が出てくる。出版社グループではグループを設けてガイドラインを作っている。SNS グループと出版社との合意が将来的には取れるようになればいいと思っている。

坂東氏:利用者側は自発的に使いたいと考えているように思う。リポジトリの方としても壁になっているのでは？著作権の問題は図書館の役割としてできるのではないかな。

Bosman 氏:利用者側としては SNS がふつうのことになっていくので、それはモチベーションになり得なくなってくる。研究者の評価の尺度を考える必要があるのでは？

林氏:こういう状況の中でどのように進んでいくのか。

フロア3:研究者の情報共有システムは相手は研究者。図書館側ではいろんな人を相手にしたいと思っている。SNS とリポジトリがどのように連携していくのが大切か。

林氏:ベンダーとして今日の話題提供とこれまでの議論はどのように捉えているか？

フロア4:研究者用のいろんなツールを作っている会社の者だが、研究者のニーズがつかみにくくなっている。

林氏:600 ものツールを見てきた人として何かコメントはありませんか？

Bosman 氏:既にあるものを見て予想することも大切だが、ビジョナリーになり未来を見ることも大切。

林氏:この手のツールの開発の裏話でよくあるのは学者が必要なものを個人的に作ることが多い。

フロア5:ソフト開発の世界での革命的变化を目にしていた。保存したらその場でバグが有るかチェックされて、公開される。ワークフローが自動化している。研究の場面でも使える場面があるのでは。101 プログラムの中に研究の中でのコミュニケーションをサポートするものはあるのか？

Bosman 氏:共同執筆用のツール等があるが始まったばかり。例えばアイデアを書くとすぐに、文献をアラートしてくれるものやスタイルを訂正してくれるものもある。

林氏:今日ご紹介した流れはあまりに急速。フロアに聞いてみたいが、この状況についていくべきか、状況を理解した上で様子眺めが良いのか。

フロア6:エッセンシャル(must have)なものを持っていない人たちが、いいもの(nice to have)に飛びついている状況ではないかと思う。研究者にとってはエッセンシャルではないことを意識して話をすすめるべき。

林氏:最後にパネルの皆さんに一言ずつ今日の議論をまとめてもらいたい。

Bosman 氏:ツールそのものではなくて、何をしたいか。それを議論することが大事。

坂東氏:研究者の実際の利用方法が聞けたのが良かった。どんなデジタルツールを使っている、何が実際の研究の中で足りないのかをキャッチアップしたいと思う。

鳥海氏:研究がやりたくてやっているのであって、ツールを使いたくて使っているわけではない。必要に迫られて、また「便利だから」がツールを使う理由。ツールの方も研究者側にリーチしてくれるような場面があるといい。

垂井氏:研究者は能率を上げたい。便利なものに飛びつく。過去 5 年くらいはすごく便利なものは今のところ出てきていないのだろう。意外なところから何かが出てくるだろう。出てきたらそれはついていく！機関リポジトリに投稿する理由は研究者に何も無い！アメリカでは全てがシャットしているという印象。研究者に実際に便利なのかをしっかりと聞くべき。

-----参加者から-----

(大学/図書館関係)

- ・教員からこのようなツールを知っているか、と問われたときにこんな感じのものだ、と話せるようになれそうです。研究者でも反応はうれしいという感想は新鮮でした。
- ・ResearchGate を実際に使っている先生の話をはじめとして、研究する側の立場の方々の話がきちんときけて有意義だったと感じています。
- ・俯瞰的な視点と研究者の現場目線の両面からの実情を知る(聞く)ことができ、この問題の考えるべきポイントが(おぼろげながら)見えてきたように思います。

(企業/その他)

- ・社内での議論は完全に井の中の蛙でした。圧倒的に世の中は進んでいますね。ビジネスとして取り組める原動力を活かして、よりよいサービスを検討します。
- ・実際に研究者としてツールを使っている先生方の生のお声が大変有益でした。

-----企画後記-----

☺ 学術情報プラットフォームは、研究活動と結び付いており、研究者のニーズをいかにくみ取ることができるかが重要であると再確認しました。今回のセミナーは、ソーシャルメディアサービスに限定した形となりましたが、研究活動のプロセスにおける位置づけや研究者のニーズへの対応は、大学図書館が構築するプラットフォーム(機関リポジトリなど)に対しても当てはまり、多くのヒントを得られたように思います。

三根 慎二(三重大学)

☺ 今回の企画はこれまでの SPARC Japan セミナーの中でもかなり異色のものとなりました。特に若手の研究者のお二人から忌憚の無い意見を伺えたことは貴重でした。そして、新しいツールやサービスは面白ければ研究者に使ってもらえるが、そのツールが無いと研究が成り立たないというレベルまで持っていった初めて持続性が生まれることは既存の製品を見ても明らかです。600 を越えたとされ

三根氏:この手のサービスは持続性が大事なのではないかと思った。進めつつ、新しい物を作っていくことが大切か。

執筆：駒井 章治(奈良先端科学技術大学院大学)

・普段交流させていただいている図書館管理者の皆様とは、(機関向け Mendeley のような)有料サービスについてしか話題が出ないので、ResearchGate や Academia.edu の登録者が Mendeley より大幅に多いのは存知ませんでした。実際のアクティブユーザーが日本にどのくらいいらっしゃるのか、興味があります。

(その他/図書館関係)

・ソーシャルメディアをどのように使っていくかは、わからなかったが、今後ソーシャルメディアと学術情報が強くつながると思うので、今から考える必要があると思った。

・研究者にとって便利なもの、図書館員は何を提供するか、色々考えさせられた。なければならぬもの、あったら良いものは何か？考えてサービスを提供しなければならぬ。

・SNS が研究の中でどう活用されているのかが分かり、今後どう関わっていくべきかを考えるきっかけとなりました。

るツール群から明日の研究者の必需品、必須のサービスをどのように生み出すか、あらゆるステークホルダーが考えるべきだと思った次第です。

林 和弘(科学技術・学術政策研究所)

☺ 大学図書館員として、教員への支援をよりよいものとするためには、研究者の情報利用行動を理解することがとても重要だと考えています。本セミナーは、既にどれだけ多くの研究者向けツールが登場しており、そしてそれらがどのように使われ、さらに何が求められているかを知ることができる、とても有益な機会になったと感じています。また一方で、数多くの研究者向けツール全てが必ずしも必要というわけではなく、分野の特性、研究スタイルに応じて本質的に必要とされるものを見極めることの重要性にも気づかせてくれるセミナーでもあったと感じています。

横井 慶子(東京大学附属図書館)